

## サイの御教え サイ大学の学生への連続講話⑥

### 神の御名の力

どの宗教も、ハートの清らかさを強調しています。

そして、清らかなハートがなければ靈性修行の一切は無価値である、とうたっています。心（マインド）がエゴでいっぱいであれば、どうやってハートの清らかさを実現することができのでしょうか？ 体は水で洗ってきれいにするのですが、ハートは、神の御名でのみ、きれいにすることができます。

阿修羅（アスラ／羅刹<sup>らせつ</sup>）の息子プラフラダ、鳥のジャターユ、動物だった象王ガジェンドラは、神の御名を抛り所とすることで自らを救済しました。エゴに満ち、自分の力を抛り所としているうちは、神の恩寵<sup>おんちゆう</sup>という御利益はやって来ません。

ガジェンドラが、「今も、そして、これから先も、神は私を救うことがおできになる。私は神以外何も知らない」と断言したときに、神は初めてガジェーン

ドラを救いに急行しました。

ドラウパデー（パーンダヴァ兄弟の共通の妻）がカウラヴァ兄弟に辱められたとき、救いにやって来たのは誰でしたか？ 武勇の誉れ高かった夫たちは、誰一人ドラウパデーを守りませんでした。ドラウパデーは、身内も他の誰も自分を救いに来ることにはできない、唯一の守護者はクリシュナ神であるとして、クリシュナに祈りました。人々は人生によくある問題を和らげる助けになるかもしれませんが、重大な危機のときに人を救うことができるのは、マーダヴァ（迷妄の支配者である神）のみです。それを信じて、ドラウパデーはクリシュナに救いを求めて祈りました。ドラウパデーを救ったのは神の御名への信心でした。

トゥルスイーダースは、ラーマは全世界の守護者であると称賛し、「ラーマ」という御名は、強力な三神

である、火の神アグニ、太陽神スーリヤ、月の神チャンドラを表していると明言しました。

ヴァールミーキは、若いころは獵師（生まれの低い部族民）でしたが、のちに聖者となり、七聖賢から教えられてラーマの御名を瞑想し、それによって永遠なる『ラーマヤナ』の著者となりました。聖人たちとの交わりとラーマの御名の唱名が、ヴァールミーキを第一の詩聖（アーデイカヴィ）にしたのです。

神の御名は、人生という海を渡っている人にとって、小船のようなものです。カリユガ（最悪の時代の意／末世）では、神の御名がこの上なく重要です。カリユガではハリ（悲しみを取り除き幻想を追い払う者である神）の御名より偉大なものはない、と宣言されてきました。カリユガでは、他のどんな靈性修行、宗教的修行によっても、平安に達することはできません。

神の御名は毒を甘露に変えることができます。神の御名は命を失ったものを生き返らせることができます。神の御名には無限の力がみなぎっています。

ミラーはクリシュナ神の御名を唱えることに心底没頭し、自分がどこに行こうとしているのか、他人は自分のことを何と思うかなど、まったく心にありませんでした。神を固く信じる者は、他人が自分をどう思うか、他人が自分を何と言うかなど、気にするべきではありません。他人がどう思っているかなどお構いなしに、自分の修行を貫くべきです。

このことは、学生諸君が学校の休みに帰省して自宅にいるとき、諸君が食事の前に声に出して祈ることに対して誰かが意見してきた場合にも当てはまりません。これは正しいとわかっていることを実行する勇気を持ちなさい。諸君は罪を犯すことを恐れているでしょうが、神の御名を唱えることに恐れは一切無用です。他の人たちが諸君を見捨てても、神の御名は最期の最後まで諸君を守ります。諸君は、たった今から、神の御名を唱えることを実践しなければいけません。いつ最期のときがやって来るかなど、誰にも言うことはできないのですから。

ブラシャーンテイ マンデイルにて  
Sathya Sai Speaks Vol.22 C15